『多甚古村』論

田辺健二

一

『多甚古村』は、昭和十四年七月に河出書房から刊行されている。これは、同年二月の『改造』、四月・七月の『文学界』などに分載されたものを一本にしたものである。「多甚古村補遺」は、昭和十五年三月の『公論』に発表した一部を加えて、同年五月に河出書房から刊行された短編集『鶫鶏』に収められたものである。そして、後、両者は合本されたもののようである。ここでは、両者を一括して『多甚古村』と呼ぶことにする。

『多甚古村』は井伏鱒二の作品の中で、〈もっとも一般に有名〉（中村光夫）、〈かれの全作品の中で最も有名〉（杉浦民平）、〈中期作品の代表作とされている〉（浅見渕）等と言われている作品である。そうであってみれば、井伏鱒二を論じる際に、やはりこれは欠かせない作品と言うべきであろう。しかしながら、いざ作品論の対象としてこれを取り上げてみると、読み返すほど不満が強くなって、ついには腹立たしくさえなってくるのである。これは取り上げるまでもない凡作、という思いが強くなってくるのをどうしようもないのである。これをもし、井伏鱒二の代表作ということにするならば、不幸にして私は井伏という作家を論じる意欲を持たない。しかしながら、井伏には「朽助のゐる谷間」をはじめとして、「丹下氏邸」「さざなみ軍記」「遥拝隊長」等のやはり名品と称していい作品が確かに存在しているのである。作家井伏の真骨頂はあくまでもこれらの作品にあるのであって、『多甚古村』が〈最も有名〉で、彼の代表作とされているところに井伏の不幸があると言わなければならない。とは言え、『多甚古村』は寺田透氏の言うように、〈きわめて、井伏鱒二らしくないにもかかはらずやはりかたも井伏鱒二的である〉[1]ことに変りはないのである。したがって、ここで敢えて結論風に言えば、『多甚古村』は井伏文学の限界と危険性とをかなり端的に示す作品であると思われる。論じる意欲を起こさせない作品ではあるが、『多甚古村』を論じることは、井伏文学の限界と危険性とを論じることになりはしないか、というのがせめてもの私の見通しである。

二

『多甚古村』は、この村の駐在巡査甲田雅一郎の日記という体裁をとっている。日数にして三十五日間の記録である。そこには、多甚古村およびその周辺で起こった出来事・事件がこまごまと記されている。野犬狩りや夫婦喧嘩の仲裁から、心中・殺人に至るまで約四十数件、およそ田舎の駐在巡査の当面しそうな出来事はことごとく登場してくる。そういう、ある意味ではごくありふれた日常的な出来事を、いかに甲田巡査が処理していったか、という話なのである。勿論、物語としての一貫した筋があるのではなく、井伏の長編に多く用いられる、数多くの挿話の積み重ねという形式である。そして、甲田巡査が物語の主人公というわけでもない。主人公はむしろ数多くの事件そのものと言ってもよく、甲田巡査はその舞台回わしとも言うべき位置にいる。とは言っても、甲田巡査は単なる舞台回わしや〈眼〉にとどまっているのではない。彼は日記の記録者であると同時に事件の処理者でもあるから、舞台回わしであるとともに半ば主人公の役割をも担っていると言ってよいであろう。こういう形式の作品は、他に『さざなみ軍記』がある。

それでは、この雑多な出来事の寄せ集めから成っている『多甚古村』の作品世界は一体何によって統一されているのであろうか。と言っても、ここではテーマのことを言っているのではない。この作品のテーマということになると、そう簡単に見つけ出せそうにもない。そうではなく、この作品を内側から支えている精神の働きを今は問題にしているのである。寺田透氏は、〈ここにあるのは人間に対する愛情といふより世態人情の面白さに釣られた興味の動きなのだ。〉[2]と言っている。つまり、ここには〈世間話に身を入れた人間〉のような井伏がいるのみ

であるというのである。杉浦民平氏は、〈愛国美談の変種、新聞の雑報記事の蒐録以上に出ることができない。〉[3]と言つている。いずれも妥当な批判であると思えるが、さらに問いを進めてゆくと、舞台回わしであると同時に半ば主人公でもある甲田巡査に、雑多な事件を処理させ、それを記録させているこの作品の底に一つの論理があることに気づくのである。今かりに、丸山真男氏の言葉を借りるならば、それは〈である論理〉と言えるのではないかと思う。運命や現実や身分を、〈そうであるもの〉として肯定してしまう考え方である。それをここでは、日常態への埋没と言つてもよい。この作品における井伏は徹底した保守主義、徹底した事勿れ主義に陥つていると思える。あるがままの触知世界に安住しようとする姿勢が露わなのである。元来、井伏は保守的な作家ではある。時流に棹さして生きることの苦手な質なのである。頑固に自分を守つて生きているように思える。あるいは、小心のために動くことができないと言つた方がより正確なのかもしれない。それがため、同人仲間のすべてが左傾しても一人同調することができず、ファシズムが文壇を覆つてもこれを鼓吹できなかつたのである。しばしば言われる如く、井伏にとつて現実は決して動かすことのできない巨大な壁のように意識されていたようである。すでに処女作において、山椒魚は岩屋の中に閉じ込められてしまつたし、「炭鉱地帯病院」の老人は〈「社会の制度といふものは大地と同じく動かすべからざるものです。」〉と深い嘆息を洩らしている。また、「朽助のゐる谷間」の朽助は、ダム工事のために立退きを迫まられて、〈「所詮は立ち退くのでせうがな！」〉と言い、「丹下氏邸」のエイも〈「私らはどのやうにも、なるやうにしかならんでありましょう。所詮は、屁は風ですがな！」〉と、自らの運命をどうにもならぬものとして諦めている。このように、初期作品群にも、この〈である論理〉は貫徹していると言つてよい。しかしながら、ここで注意せねばならないことがある。同じく〈である論理〉と言つても、『多古甚村』におけるそれと、初期作品群におけるそれとは、そのありようがかなり異なつているのである。動かすべからざる運命や現実を〈そうであるもの〉として認め、これに従うという点に関しては、両者は共通する。しかし、初期作品群における人物達はたとえば山椒魚が〈全身の力を込めて岩屋の出口に突進した〉ように、また朽助が水の底に沈んで行く己の家を見て、〈「それはいっそ咎でがす！ああ私らはつらいでがす！」〉と叫んだように、決して運命や現実に易々と従つているのではない。ある時にはこれに体当りし、ある時は絶叫しながら、ついにはその無駄であることを知って、嘆息をもらしつつ諦めているのである。彼らの心中は決して穏かなものではないのである。それがために、「炭鉱地帯病院」の老人も〈深い嘆息をもらしながら懐中から手拭をとり出して、彼自身の目を圧へた〉のであるし、「丹下氏邸」のエイも〈彼の顔全部を覆ふ太くて深い皺は、心の激しい苦悩を示して硬直した〉わけである。彼らは、〈である論理〉を肯定しているのではなく、やむなくこれに従わされているのである。ところが、『多甚古村』の甲田巡査の場合は、これとはかなり事情が違つてくる。彼は易々とこの論理を肯定している、というよりむしろこれを信奉していると言った方が正確であろう。なぜなら、彼はこの論理を覆えそうとする者に対して敵愾心を燃しているからである。彼はまったく日常態の中に居坐ってしまって、強大な運命や現実をそれとして意識すらしてゐないかのようである。勿論、彼もまた〈である論理〉に従わされているのに外ならないのだが、少くとも彼自身はそれを意識していないのである。以下、作品に即して甲田巡査における〈である論理〉を見てゆきたい。

三

甲田巡査における〈である論理〉のありようは、〈村の安寧を守る〉ということである。多甚古村を多甚古村であるままに守つていこうとする発想である。彼のすべての言動はここから出発していると言つても過言ではないであろう。これは、ほとんど絶対の不立文字として甲田巡査の心の奥底に焼き付いているかのようである。勿論、彼が村の駐在巡査であることを考えれば、むしろこれは当然すぎることであるかもしれない。しかし、それが絶対の不立文字となり、次のような形で具体化されるとき、問題はないであろうか。

第一に、〈村の安寧〉を乱す恐れありと認められたものに対しての、反感ないしは攻撃である。それは、具体的には、新しいものや都会の風俗への反感である。ここには、作者井伏のある意味での保守主義の反映があると思われる。そのこと自体は決して非難されるべきものではないであろう。しかし、一切の新しいもの、一切の都会的なものを否定するということになると、問題はまた別である。『多甚古村』の最後の挿話に登場してくる衛生班長である薬局の主人の如き人物は、単に偏屈でユーモラスな人物として笑ってすますわけにはゆかない。

※まこの衛生班長は新しい薬と政府の指令以外は、世の中の新しいものは一さい否定するといつてゐる。

そして、自転車のアルミ標板や釣鐘を政府に供出しようとして運動している青年達について、次のように言うのである。

この人たちは美人床や煙草屋へ遊びに行かない連中で、衛生班長の太陽堂主人を精神的に主班とする硬派の人たちである。

この場合、甲田巡査は明らかに彼らの味方である。そして、痴情のために心中騒ぎを起こしたり、美人のいる床屋で夜遅くまで騒いだり、煙草を吸ったりする青年は、ひとしなみに軟派として退けられている。また、都会から村へ入ってくる人間や、帰省中の大学生も同様に胡散臭い目で見られるのである。たとえば、村の別荘に住むようになった町の女のマサコは、スパイ容疑者としてそれとなく甲田巡査の監視を受ける。持っているアンリ・ルソーの複製やプルーストの小説までが、＜危険思想＞かどうか調べられるのである。（このあたりに限って、甲田巡査の物腰はかなり滑稽であるが、それにしてもゴリゴリのファシストとして戯画化されているわけではない。全体として見れば、やはり井伏は彼を肯定的に描いている）。結局は、＜思想的にも怪しいと思はれるところはない＞けれども、＜「いろいろな意味で、村民にとつては或ひは有害無益な女でありまひよう。」＞とされてしまうのである。また、春休みで帰省中の大学生松本も、＜思想的には無難らしいと思はれるが、毎日のやうにバスで町へ出かけて行きたいて い終バスで村に帰って来る。＞と、さも胡散臭さげに見られている。たしかに、甲田巡査の立場になれば、それも一面理解できなくはない。しかし、作者井伏までがこうした見方を容認しているとなると、大いに疑問を抱かざるを得ないのである。

第二には、事件の真の原因の追及を回避して、争いの芽を摘み取るという処理の仕方である。たとえば、一月八日の項、飲んべえの作さんが深酒をして遊廓へ行こうとしているのを止めさせた後で、次のように日記に書いている。

飲んべゑは小心な男だが、酒が好きで女が好きで仕事が嫌ひなのである。家には何の家具もなく、商売は魚屋をしてゐるが穢いのでちつとも売れず、このごろは仲仕をしたり海苔の運搬人をしたりして酒手を稼いでゐる。

作さんの貧乏と乱脈は、結局彼の性格のせいに帰せられてしまって、甲田巡査の考えは決してそれ以上には発展しないのである。こういう手軽な処理の仕方は、甲田巡査に一貫しているのだが、次の例などはその典型と言ってよいだろう。十一月二日の項、春さんの女房オテツの自殺未遂事件が新聞記事になって村中のセンセーションを巻き起こした後、次のようなやりとりがある。

私のおそれてゐた通り、反村長派の吉野さんと七十の老人が私のところにやつて来て、西分の栄助さんといふ老人が「私らは新聞を見て来たけんど、あれは春の嬶のことですやらう。村長に責任がある。春に見舞金などやるけに、嬶も、自分がこれまで貧乏であつたことを痛感したのや。あいつらの貧乏は、今さらのことではなかつたのやけん」と偉い見幕を見せるので「まあさういふな」と私は栄助老をなだめ吉野さんたち一同に「これは誰の責任でもない、自然だ。自然がそこまで進行して行ったのや。真の理由は天才でないかぎり誰も説明できぬのや。何が原因か、或ひは本人にもわからぬかもしれぬ」といつた。

春さんの女房が自殺を図ったのは、栄助老の言うようには「村長に責任がある」のではないかもしれない。あるいは甲田巡査の言うように＜「何が原因か、本人にもわからぬのかもしれ」＞ない。そして、甲田巡査は、この事件が反村長派の連中の政治運動に利用されるのを避けようとしたものではあろう。それにしても、＜「これは誰の責任でもない、自然だ。」＞というのは、明らかに欺瞞に満ちた言葉である。＜村の安寧のため＞には、一人の女の自殺の原因まで、＜自然だ＞として処理されてしまつている。そして、そうした解決の仕方に、甲田巡査は少しの疑問をも抱いていない。ここに、＜である論理＞は極まっていると言えないだろうか。井伏の初期作品群における、人間の悲惨に寄せる温かい眼ざしは一体どこへ行ってしまったのだろうか。この作品では、井伏の眼にまつたく日常態の中に埋没してしまつている。それを深く掘り下げて、その裏に隠されている人間の真実の姿を具体的に把握し得べき切り口は至る所に見えているのに、井伏の眼は少しもそこに食入って行かないのである。同じような素材を扱いながら、伊藤永之助の「梟」（昭12）や「鶯」（昭13）や『警察日記』（昭27）などには、少なくともこうした人生の悲惨と真正面から対決しようとする情熱を読み取る事ができる。井伏は、ここにおいて、こうした現実との格闘を避けて通っている。勿論、当時の社会状況というものを十分に考慮に入れなければならないが、それは「梟」や「鶯」の場合とて同様であつたはずである。

第三には、民心慰撫とも言うべき姿勢である。甲田巡査は、多甚古村の安寧を保つために様々の努力をしているが、前記二つの外にこの民心慰撫の姿勢がある。彼が人情巡査と言われる所以の一つはこの姿勢にあると言ってよい。たとえば次のような姿勢である。飛行場の埋立工事の人夫で酒癖の悪い男がうどん屋で乱暴していたのを保護したあと、〈「と云うて、かう乱暴されちゃ帰らせぬが、埋立工事の事務所の方へは特別で内証にしてやらう。」〉と言うのである。また、万引を疑われて自殺を図った老婆に対して、〈「警察は困ってをる人をいぢめるのが本意ではないのですけん、上司と話して絶対秘密にしてあげます。」〉と言っている。その他これに類する甲田巡査の姿勢が四件ほど見られるが、総じてささいな事件を起こした人に対して、これを表立った扱いにしないという配慮である。あくまで制度の枠の中でのごく小さな配慮にすぎないが、彼の人情巡査ぶりはここに発揮されていると言うことができるだろう。しかし、それも次のような彼の発言にぶつかると、その人情味ある配慮がどの辺りから出て来ているかを見せられたようで、興をそがれてしまうのである。三月二十日の項。酒乱家として有名なデレ助が、またしても飲み屋で大暴れしているのを保護した際の発言である。〈私は彼を本署に連行しようとしたが、国家非常時の際に小さな事にこだわると却って民心を萎縮さすものと考えて、私の事務所へ連れて来た〉。これは明らかに権力者側の発想である。甲田巡査の人情も、こうなると人民支配のためのアメに外ならないと言われても仕方があるまい。四月二日の項では、〈「踵れものにさはるやうにすると、反ってつけ上るのが人情らしいけんなあ。」〉とも言っている。初期作品群における庶民の作家井伏は、ここではそれとは全く逆の立場からものを言っているようである。杉浦民平氏の言う〈権力と人情のからみ合いを謳歌する浪花節水戸黄門の半近代人化〉[4]とは、このことであろう。さらに例をあげれば、たとえば十一月十日の項。甲田巡査がこの村に赴任して来たばかりの頃、村の大地主村田さんに満座の中でやり込められた際、〈村の長老たる人を明朗にさせておくことは村のためだと思〉って謝っている。以後この老人と親しくなり、〈爾来私は巡回のときたま村田さんの宅に寄って、村の動向をきくやうに心がけ〉るのである。〈村の安寧のため〉辞を低くして村の大地主の機嫌を損ねないようにしている。彼が結びついているのは、あくまでもこうした村の支配層であって、決して下層の庶民ではないことが明らかであろう。一月十九日の項には、そういう支配層とも言うべき人間達が集まっている。それは柔道家平本平太先生の長男の出征祝賀会においてである。〈出席者は村会議員、分会長、村内会長、校長、地主、防護団長、眼界師（住職――田辺注）、それから私を加へて二十人あまりの顔ぶれであった〉。こうした社会階層は、丸山真男氏の分類によれば、〈擬似インテリゲンチャ・亜インテリゲンチャ〉という階層である。家永三郎氏の言葉を借りるならば、〈在村地主イデオロギー〉の持主達、ということになるであろうか。

第四には、非常時体制の強調である。この作品の発表された昭和十四・五年と言えば、日中戦争が次第に泥沼化してゆく時期である。国家総動員法は、昭和十三年四月一日に公布されている。この作品内の時もこの時期に重なっていると見て間違いはない。そうした時代を背景にして、甲田巡査は盛んに〈非常時〉を連発し、それによって〈村の安寧〉を保とうとしているのである。ほとんどそれは彼の切札の如き観さえある。たとえば、酔ってタクシーの運転手に暴力を振った太田黒氏は、〈この非常時にガソリンを濫用し、無辜の同胞や警官を打擲した罪は決して軽くないのである。〉として仕末書を書かされている。また女を孕ませたうえ、自殺させた町の男は、〈「全くだらしない奴ぢゃなあ。この非常時に何ぢゃね、くだらぬ手ぎわで女を困らせたり毒を嚥ませたり、世間を騒がして済むとおもふか。」〉と叱られている。さらに、村を二つに割っての水喧嘩が起った際、彼はその仲裁に立って次のように演説する。

「この国家総動員の非常時に、このやうな不詳事がこの村にもあったとしたら、それこそ由緒ある村の歴史に傷がつき、祖先のためにも申しわけない。その上に、国家に対しても相すまぬ。また出征してゐる息子さんや兄弟たちにも何と云ふてお詫してよいか。また私も村の平和をあづかってゐる以上、職を止して申し開きせにやならんと思ふ。」

この演説によって水喧嘩は一気に解決し〈一同は端然と坐りなほし、大日本帝国万歳と多甚古村万歳を三唱して解散〉[5]する。〈非常時の村の安寧のため〉というのが甲田巡査の絶対の規範であり、村民を説諭する際の切札なのである。ここにおける井伏は、初期や戦後の彼に比較すると、ほとんど別人の感がある。

以上見てきたように、甲田巡査における〈である論理〉は、具体的には〈村の

安寧〉を守るという形をとって現われていることが分る。初期作品群の登場人物達にとって、それはやむなく従わされた論理であったが、彼にとっては、自ら信奉する論理に外ならないのである。ここにおいて、〈である論理〉は〈である論理〉としてとどまり、ついに〈する論理〉への発展の道を失なってしまっている。初期作品群には少なくともその可能性はあったのだが。そして、『多甚古村』は戦争を謳歌する国策文学ではないにしても、批判精神を欠いた、間のびのした風俗小説に堕してしまったのである。ここに我々は、現実とのきびしい緊張関係を失って、日常態の中に埋没してしまっている井伏を見るのである。

では、一体なぜ井伏はそのような所に陥ったのであろうか。その点を次に一瞥しておく。

四

一つの原因は、井伏における自覚的論理の欠除、抽象的思考の欠除であると思われる。元来、井伏は思想というものを拒否した作家であるが、それがこの作品の場合大きな弱点として働いている。丸山真男氏は、日本の近代文学における実感信仰に触れて次のように言っている。

あらゆる政治や社会のイデオロギーに「不潔な抽象」を嗅ぎつけ、ひたすら自我の実感にたてこもるこうした思考様式が、ひとたび圧倒的に巨大な政治的現実（たとえば戦争）に囲繞されるときは、ほとんど自然的現実にたいすると同じ「すなお」な心情でこれを絶対化する云々、（『日本の思想』岩波新書）

そして、杉浦民平氏は『多甚古村』など井伏中期の作品を批判して次のように述べている。

一九三六年以後わが帝国主義がカタストロフへまっしぐらに突入して行ったとき、そしてはじめの方で言及したごとく、その強力な統制力がこの国の海辺山麓の果てまで及んだとき、「左傾」を拒んだ井伏には、社会乃至人間の図絵を正しく深く描くことができなくても当然だった。（中略）今われわれはこの作家井伏のうちにあの侵略戦争を疑わなかった庶民の姿を見とめなくてはならぬ。（筑摩書房版『現代日本文学大系、井伏鱒二・上林暁集』解説）

両氏はほとんど同じ事を述べていると見ていいだろう。〈抽象〉や〈左傾〉を拒否して、〈ひたすら自我の実感にたてこも〉った井伏の、おそらく最大の弱点を突いていると言えよう。複雑な現実を具体的総体として捉え、これを生き生きとした形象として表現するためには、思想の力が不可欠のものであろう。その思想の力が井伏には欠けていた。『多甚古村』における〈である理論〉・日常態への埋没は、その意味で必然と言ってよかろう。

二つめの原因としては、視点の問題がある。井伏はおそらく、『本日休診』の町医者と同じように、長編小説の舞台回わし、話題提供者として駐在巡査を選んだものであろう。しかし、そこに彼の計算違いがあったのではないか。駐在巡査は二つの顔を持っている。彼は庶民であるとともに、権力の末端機関でもある。当然彼の眼は、人民支配の論理によって曇らされてしまう。いくら彼が人情巡査・模範巡査であっても、そんなこととは無関係に、一つの巨大な機構の働きとして彼はそうならざるを得ない。井伏に自覚的論理がないだけに、なおさらのことである。

そして、三つめの原因として、時代精神の影響をあげなければならない。この作品の書かれた昭和十四・五年といえば、言うまでもなくファシズムが猛威を振っていた時代であり、日本のすべてを戦争に駆り立てていった時代である。当然、その暗い影はこの作品にも大きくその羽根を広げてる。井伏のいつものユーモアとペーソスを湛えたやわらかな感受性は、ここではすっかり影をひそめて、ひからびた常識的人情がまかり通っている。もはや『多甚古村』の失敗は決定的なものとなる外はなかったのである。

注1　筑摩書房版『現代日本文学全集井伏鱒二集』所載の「井伏鱒二論」
2　同前
3　筑摩書房版『現代日本文学大系井伏鱒二・上林暁集』解説
4　同前
5　筑摩書房版の全集はじめ、戦後の版では、この部分は〈一同は坐りなほし、シャン、シャン、シャンと手を拍って、みんな「どうも有難う」と口々にいって解散〉するように改められている。

補　引用文中の旧漢字はすべて新字体に改めた。